

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第940号 平成27年6月2日

演出過剰（2）

今回の調査委員会の報告書に対して、読売新聞の社説では、「意図的に架空の相談場面を作り上げたとは認められない」と結論付けた調査委員会に対して、それは「やらせの定義を狭くとらえ過ぎていないか」と疑問を呈しています。その上で、事前に打ち合わせて自然な振る舞いらしく行わせるというのが「やらせ」の一般的な意味で、そういう事からすれば、今回の行為は演出の範囲を逸脱し、「やらせ」があったと批判されても仕方あるまいと述べています。

巷間、多重債務者が出家して名前を変え新たな融資を受ける「出家詐欺」が存在する事は事実だとしても、ブローカーと多重債務者の相談の場面に記者が介在し、しかも、記者が多重債務者にインタビューする際お互いに初対面を装うというような演出を「やらせ」ではないといい切る調査委員会の判断には、私も疑問を持っています。

映画監督でドキュメンタリー作家の森達也氏は、ドキュメンタリーというものについて、日本では「表現行為というよりも事実の客観的記録としてドキュメンタリーを見なす人の方が多数派だろう（同氏著「ドキュメンタリーは嘘をつく」から）」と述べています。

確かに私も、製作者の作為が入っていないからドキュメンタリーなのだろうと思っていた節があります。

しかし、ドキュメンタリーといえども一つの表現方法であると考えれば、そこには製作者の意図や価値観が投影されるのは必然という事になります。

例えば、日々目にする報道写真は、文字通り事実を客観的に切り取ったもので、そこには人為的な作為は入っていないと考えがちですが、森氏は「カメラマンという一つの主体の内側で濾過された現実は、シャッタースピードや絞りなどの微調整や構図（フレーミング）等の作為（自覚的な場合もあれば無自覚な場合もある）を施され、表現として昇華する（上述書から）」と述べているように、報道写真も一つの表現方法と捉えれば、そこに製作者の意図が反映される事は避けられません。というより、そもそも表現というのはそういうものであり、それは、写真であれドキュメンタリーという映像であれ同じ事です。

右の写真は、戦争写真家ローバート・キャパがスペイン戦争で撮影したもので、世界的にも有名な報道写真です。この写真は兵士が撃たれて崩れ落ちる瞬間を撮ったものとされており、戦争の不条理を伝える傑作といわれています。この写真には、兵士が撃たれて倒れる瞬間を撮ったものではないという真贋論争が付いて回っているのですが、しかしこの写真には、ローバート・キャパの意思（反ファシズム・反戦）が込められている事を疑う人はいないでしょう。



森氏は、一枚の写真が現実の断片であったとしても、「結局のところそこに立ち現われるのは、やはり撮り手の世界観でありメタファーなのだ」と述べると共に、「要するに、記者やディレクターは、自らの感覚の地場からは絶対に逃れられないし、この座標軸はアプリアリに与えられているものではない」と指摘しています（上述書から）。

私は、この指摘は重要だし、日々の様々な断片をニュースとして報道する立場にある人は、この事を十分認識して欲しいと思います。

森氏は、一つの例として「ストレートニュースで紹介される10秒間の悲惨な交通事故の現場でも、道路脇に供えられた花から撮るか、かたわらを疾走するトラックから撮るかで、映像の印象は全く変わる。これを決めるのは撮る側の主観なのだ」と述べています（上述書から）。

私達は、報道番組を見る時、あたかもそれは事実を正確、忠実に伝えていると思っていますが、しかし、現実には、記者やカメラマンの目や耳、更には、彼等の価値観といったフィルターを通して提供されているのであり、報道番組を見る私達自身もまた、その事を十分認識して置く必要があるでしょう。

森氏は、「ドキュメンタリーは嘘をつく」の中で、「ドキュメンタリーとは、映像でとらえた事実の断片を集積し、その事実がもともと持っていた意味を再構成する事によって別の意味が派生し、その結果生み出される一つの〈虚＝フィクション〉である」という佐藤真氏（ドキュメンタリー映画監督）の言葉を引用しながら、「映像はすべて作為の産物だ」と述べています。

日々報道番組の中で流されるニュースにも、常に記者やディレクター等の作為が働いているとすれば、いわゆる「客観報道」等というものは存在しないという事になります。とはいえ、集積し、再構成しようとする「事実の断片」そのものに作為があってはなりませんし、そこに作為があっては、報道の名には値しない事になるでしょう。

だからこそ、記者やカメラマンは、常に事実とどのように向き合い、その中から

何を伝えようとしているのか問われているのであり、その事への恐れや謙虚さを忘れてはならないと思います。

映画作家の想田和弘氏は、テレビ・ドキュメンタリーの作り方への違和感があるといいます。その違和感というのは何かというと「台本至上主義」と「分かりやすさ至上主義」とでも呼ぶべき、テレビ番組の制作現場に蔓延りがちな悪弊である、と述べています（同氏著「なぜ僕はドキュメンタリーを撮るのか」から）。

そして彼は、ドキュメンタリーを撮る際、意識的に

- ・被写体との撮影内容に関する打ち合わせは、（待ち合わせの時間と場所など以外は）原則行わない
- ・台本は書かない。作品のテーマや落とし所も、撮影前やその最中に設定しない。行き当たりばったりでカメラを回し、予定調和を求めない

といった方法を採用しているといいます（上述書から）。

「クローズアップ現代」の製作スタッフ、取り分け取材を担当した記者やディレクターに、想田氏のような明確な意思があったとは思えません。

森氏は「自らが正義であると思い込んだメディアは暴走する」と述べています（同氏著「ドキュメンタリーは嘘をつく」から）。

もしも「クローズアップ現代」の製作スタッフが、「自分達は社会の悪を暴くために報道している。その正義を貫くためには、多少の『やらせ』位は許される」と考えていたとしたら、それは傲慢というものだと思います。

（塾頭：吉田 洋一）